

教員養成大学生の教育相談における曖昧さへの態度と 教師効力感

—進路選択に対する自己効力の高低による比較—

西村 佐彩子

Attitudes towards Ambiguity in Educational Counseling and Teacher Efficacy among Teacher Training College Students: A Comparison Based on Career Decision-Making Self-Efficacy

Sayako NISHIMURA

Accepted June 19, 2024

抄録：本研究では、教員養成大学生 120 名を対象に、教育相談における曖昧さへの態度と教師効力感の関連について検討を行った。その結果、曖昧さへの不安は教師効力感と負の相関が、曖昧さの統制は教授・指導効力感と、曖昧さの享受は子ども理解・関係形成効力感と正の相関が示された。また、進路選択に対する自己効力の高い学生は、低い学生と比べて、曖昧さの統制および教師効力感が高かった。進路選択に対する自己効力の高い群では、曖昧さへの態度と教師効力感の間に多くの有意な相関がみられた。一方、進路選択に対する自己効力が低い群では、曖昧さの統制と子ども理解・関係形成効力感にのみ負の相関がみられた。進路を主体的、計画的に選択している学生に、教育相談における曖昧さへの態度と教師効力感の関連が顕著にみられることが示唆された。

索引語：曖昧さへの態度、教育相談、教師効力感、進路選択に対する自己効力、教員養成

Abstract: This study explored the correlation between attitudes towards ambiguity in educational counseling and teacher efficacy among 120 students enrolled in teacher training colleges. The findings indicated a negative correlation between anxiety towards ambiguity and teacher efficacy, a positive correlation between control of ambiguity and teaching efficacy, and a positive correlation between enjoyment of ambiguity and efficacy in understanding children. Moreover, participants with high career decision-making self-efficacy demonstrated greater control of ambiguity and teacher efficacy compared to those with low career decision-making self-efficacy. Significant correlations were predominantly observed between attitudes towards ambiguity and teacher efficacy among participants with high career decision-making self-efficacy. Conversely, in participants with low career decision-making self-efficacy, only control of ambiguity and efficacy in understanding children exhibited negative correlations. It was suggested that the relation between attitudes towards ambiguity in educational counseling and teacher efficacy was more pronounced among students who were making independent and planned choices about their

career paths.

Key Words: attitudes towards ambiguity, educational counseling, teacher efficacy, career decision-making self-efficacy, teacher training

1. 問題と目的

今日の教育相談における課題は多様化・複雑化しており、対応や答えが明確でないことも多い。そのため、教師を目指す教員養成大学生が、将来教師となりこれらの課題に取り組む際には、知識やスキルだけではなく、学校現場で遭遇する曖昧で割り切れない事態や答えのない事態にどう持ちこたえられるかが問われると考えられる。そこで本研究では、曖昧さへの態度という観点を取り上げる。そして、教員養成大学生の教育相談における曖昧さへの態度と教師効力感の関連について、進路選択に対する自己効力の高低もふまえながら検討を行う。

(1) 学校現場と曖昧さ

曖昧さ (ambiguity) とは、十分な手掛かりがないため適切にカテゴリー化できない状態であり、熟知した手がかりが全くない新しい事態である新奇性 (novelty)、考慮すべき手がかりが多すぎる複雑な事態である複雑性 (complexity)、個々の手がかりが異なる事態を指す矛盾した状態である不可解性 (insolubility) の3つに分類できる (Budner, 1962)。

教師が学校現場において遭遇する曖昧さとしては、新しい学級での児童生徒との出会い (新奇性)、教師の仕事や教育課題の多様さと複雑さ (複雑性)、児童生徒の不可解な言動や教師間の意見の食い違い (不可解性) などが挙げられるだろう。社会の急激な変化とともに児童生徒の発達上の多様性や家庭環境の複雑性は増している (文部科学省, 2022) という背景からも、とりわけ教育相談に関する課題は多くの曖昧な事象をはらんでいるといえる。さらには、児童生徒の行動の背景や心理面には、明確には割り切れない曖昧さが存在している。昨今の教育現場においては、「令和の日本型学校教育」の実現に向けて、子どもたちの多様化を始めとした課題を背景に個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が指摘され (中央教育審議会, 2021)、誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策において、心の小さな SOS を見逃さず、学校の風土の「見える化」を進めていくなか (文部科学省, 2023)、教師が直面し避けることのできない曖昧さはさらに増していくことが予想される。教育実践や児童生徒への関わりにおいて、教師が曖昧さをこなせるかどうかは今後ますます問われると考えられる。

教員養成においても、教員養成大学生が曖昧さをこなす力を育成することが求められるだろう。教職課程コアカリキュラム (教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会, 2017) では、「教育相談 (カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。) の理論及び方法」の全体目標として、「幼児、児童及び生徒の発達の状況に即しつつ、個々の心理的特徴や教育的課題を適切に捉え、支援するために必要な基礎的知識 (カウンセリングの意義、理論や技法に関する基礎的知識を含む) を身に付ける。」と明記されている。個々の心理的特徴や教育的課題を適切に捉え支援するといったときに、教員養成大学生が、教育相談・カウンセリングや心理学に関する理論や技法を身に付けることはもちろん必要である。しかし、子どもや集団にさまざまな情

緒が渦巻く学校現場において、ときに教師はその激しさに圧倒されたり巻き込まれたりする(e.g. Youell, 2006 平井監訳 2009) ことを考えると、教育相談に関する知識やスキルを身に付けるだけでは、多様化・複雑化する教育課題への取り組みや児童生徒との関わりに際して、教師が持ちこたえることが難しくなることも起こりうるだろう。そのため、教員養成の段階で、教員養成大学生が曖昧さに持ちこたえる力を身に付けていくことが求められるのではないだろうか。

(2) 教育相談における曖昧さへの態度

このようなさまざまな曖昧さに対して、それに遭遇した個人がどのような態度を持つのかについて焦点を当てたのが、曖昧さへの態度である。曖昧さへの態度に関する先行研究は、曖昧性耐性の低さという観点から研究が行われてきた。曖昧性耐性の低さは、Frenkel-Brunswik の権威主義性格研究に端を発する概念であり、「価値判断に関して白黒をはっきりさせようとし、早急な結論に達し、しばしば現実の無視にいたり、全体的に絶対的で明確な他人への承認・拒絶を求めようとする傾向 (Frenkel-Brunswik, 1949)」と定義され、「曖昧な状況を脅威の源として知覚する傾向 (Budner, 1962)」という曖昧さへの耐えられなさという一次元的な耐性として、否定的側面を中心に測定及び検討が行われてきた (e.g. Budner, 1962; 増田, 1998; 友野・橋本, 2005)。

これに対して西村 (2007) は、曖昧性耐性を、曖昧さに耐えられるか否かという一次元ではなく、曖昧さへの態度という多次元的な態度として捉えなおし、否定的側面だけでなく肯定的側面にも焦点を当てる必要性を強調した。西村 (2007) は、曖昧さへの態度を、「曖昧な刺激の処理において生じる、認知的、情緒的反応パターン」と定義し、大学生を対象に日常場面における曖昧さへの態度尺度を作成した。曖昧さへの態度は、曖昧さへの不安（曖昧さに不安などの情緒的混乱や、それに伴う対処の難しさを感じる）、曖昧さの統制（曖昧さを否定的に評価し、知的に把握・対処して明らかにしようとする）、曖昧さの排除（曖昧さを認めず、排除して白黒つけたい）という否定的側面と、曖昧さの享受（曖昧さを魅力的なものとして評価し、関与していくことに楽しみを見出す）、曖昧さの受容（曖昧さをそのまま認めて受け入れられる、親和性や寛容さ）という肯定的側面の 5 つの側面からなる。曖昧さへの否定的態度は不適応傾向と、曖昧さへの肯定的態度は適応的傾向との関連が指摘されている (e.g. Enoki et al., 2019; 西村, 2007)。

学校現場、とりわけ教育相談において生じる様々な曖昧さに対する教師および教員養成大学生の態度について検討する際にも、単に曖昧さに耐えられるか否かだけでなく、どのように曖昧さに耐えられなかったり、どのように曖昧さをこなすことができるのかという視点から考えることは役立つと考えられる。以上より、本研究では教員養成大学生の曖昧さへの態度という観点から検討を行う。

教員養成大学生の曖昧さへの態度に着目するにあたって、日常場面における曖昧さへの態度と、教育相談場面における曖昧さへの態度は異なる可能性が考えられる。西村 (2012a) は、臨床心理士を対象とした予備調査をもとに、日常版曖昧さへの態度の項目の一部を削除・修正・追加し、心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度を測定する項目を作成した。心理面接における曖昧さへの態度では、曖昧さの享受を、曖昧さを肯定的に評価して関心を持ちながら関与していこうとする態度として捉えなおしている (西村, 2022)。西村 (2021) は、教員養

成大学生を対象に教育相談場面を想定させたうえで、心理面接における曖昧さへの態度項目（西村，2012a）を実施し、探索的因子分析を行った。その結果、曖昧さへの不安、曖昧さの統制、曖昧さの排除、曖昧さの享受、曖昧さの受容の5因子からなる教員養成大学生の教育相談における曖昧さへの態度尺度を作成した。曖昧さへの肯定的態度は教育相談において曖昧さをこなす力を、曖昧さへの否定的態度は教育相談において遭遇する曖昧さへの耐えられなさを表すと考えられる。そこで本研究では、教員養成大学生の教育相談における曖昧さへの態度尺度（西村，2021）を用いて、教員養成大学生の教育相談場面における曖昧さへの態度を測定する。

（3）教員養成大学生の教師効力感

教育相談における曖昧さへの態度が、学校現場や教育相談上の課題への対応力とどのように関連するのかについて検討するため、本研究では教師効力感を取り上げて検討を行う。教師効力感は、教育場面において子どもの学習や発達に望ましい変化をもたらす教育的行為をとることができるという教師の信念である（Ashton, 1985）。

春原（2007）は、教師効力感の測定領域の拡大を試み、教科指導に関する効力感（教科指導をするうえで必要な行動をとることができるか、またそのための能力を有するか否かに関する信念）、学級経営に関する効力感（学級を経営していくうえで必要な行動をとることができるか、またそのための能力を有するか否かに関する信念）、対子ども関係に関する効力感（教師と子どもの間に親密な人間関係を作るうえで必要な行動をとることができるか、またそのための能力を有するか否かに関する信念）の3つの信念に整理した。そして、教科指導領域に加えて、学級経営や児童生徒理解の領域も含めた教師効力感尺度（春原，2007）を作成した。本尺度は教育学部生を対象に作成されていることから、教員養成大学生を対象とする本研究においても本尺度を用いて検討を行う。先行研究では、教育実習前より教育実習後の教師効力感が高くなる（春原，2007）ことや、模擬授業前後では学級管理・運営効力感のみ高くなる（春原・坂西，2010）ことが示されている。宇津木（2000）は曖昧状況を多く見出し得る教育現場ほど教師は自己効力感が低下しやすいことを指摘しており、曖昧さにどのような態度を持つかは教師効力感とも関わってくると考えられる。本研究では、とくに教育相談と関わると考えられる子ども理解・関係形成効力感（対子ども関係に関する効力感）が、教育相談における曖昧さへの肯定的態度と関連することが予測される。

（4）教員養成大学生の進路選択に対する自己効力

教育相談における曖昧さへの態度と教師効力感の関連を検討する際に、進路選択に対する自己効力感についても取り上げる。浦上（1995）は、主体的な進路選択力と類似した概念として、進路を選択・決定する過程で必要な行動に対する遂行可能感である進路選択に対する自己効力（Taylor & Betz, 1983）について着目し、進路の計画力と進路の選択力を包含していることを指摘した。教員養成大学生を対象とした研究では、進路選択に対する自己効力は、教育実習前より教育実習後の方が高くなる（長岡他，2001）、教職志望度より教職適性に強い影響を受けている（白尾他，2005）ことが指摘されている。

教師を志望するあるいは迷っている学生においても、自身の進路を主体的・計画的に選択している学生もいれば、進路選択に自信がない学生もいると考えられる。そこで、進路選択に対

する自己効力と教育相談における曖昧さへの態度および教師効力感との関連について調べたうえで、進路選択に対する自己効力の高低によって、教育相談における曖昧さへの態度と教師効力感の関連に違いがみられるかについても検討を行う。

2. 方法

(1) 調査対象者

調査に協力した教員養成大学生 155 名のうち、欠損値及び教師を志望していないと回答した学生を除いた 120 名（男性 40 名、女性 80 名、平均年齢 20.15 歳、 $SD=.78$ ）を分析対象とした。

教師を志望していると回答した学生は 76 名、迷っていると回答した学生は 44 名であった。志望校種は、幼稚園 32 名、小学校 57 名、中学校 7 名、高等学校 14 名、特別支援学校 9 名、その他（中学校・高等学校）1 名であった。

(2) 調査時期

2021 年 2 月～2022 年 1 月

(3) 調査内容

1) 教師志望の有無（志望している、迷っている、志望していない）と志望校種

2) 教員養成大学生の教育相談における曖昧さへの態度尺度（西村, 2021）

曖昧さへの不安（はっきりしない状況ではどうしたらいいかわからなくなる。など 7 項目）、曖昧さの統制（確実にないところは確認して明らかにしたい。など 7 項目）、曖昧さの排除（どっちつかずな立場はどちらか一方にはっきりさせるべきだ。など 4 項目）、曖昧さの享受（いくつかの解釈ができる時はいろいろな角度からものごとを見ていきたい。など 6 項目）、曖昧さの受容（はっきりしていないことがあっても、そのままにしておくのがいい。など 3 項目）の 5 因子、27 項目。「将来教師になったときの、教育相談場面におけるあなたの感じ方や考え方にどの程度あてはまると思うか」について、1 まったくあてはまらない～6 非常にあてはまるの 6 件法で評定を求めた。

3) 教師効力感尺度（春原, 2007）

学級管理・運営効力感（まとまりのあるクラスをつくる自信がある。など 11 項目）、教授・指導効力感（わかりやすい教え方ができる。など 9 項目）、子ども理解・関係形成効力感（子どもの気持ちや考えをよく理解できる。など 6 項目）の 3 因子、26 項目。「これからあなたが教師として教壇に立った場合（教育実習を含む）、以下の記述がどのくらい自分にあてはまると思うか」について、1 そう思わない～5 そう思うの 5 件法で評定を求めた。

4) 進路選択に対する自己効力尺度短縮版（浦上・脇田, 2016）

大学生・短大生を対象に作成された進路選択に対する自己効力尺度（浦上, 1995）の短縮版（将来のために、在学中にやっておくべきことの計画を立てること。など 10 項目）。「自分自身の進路選択に関してどの程度自信があるか」について、1 まったく自信がない～4 非常に自信があるの 4 件法で評定を求めた。

(4) 手続き

調査は無記名で実施した。調査対象者には、調査への協力は自由であること、参加の有無により利益・不利益は生じず、成績評価とは一切関係ないこと、回答途中で負担を感じた場合は調査への協力をとりやめてかまわないこと、結果は統計的に処理を行い個人が特定されないこと、本研究課題以外の目的でデータを使用することはないこと、調査票の提出によって本研究への協力同意とすることについて説明を行った。なお、教職課程科目の教育相談の理論及び方法を履修後の学生に調査を実施した。

3. 結果

(1) 各下位尺度の基礎統計

分析対象となる 120 名について、教育相談における曖昧さへの態度の下位尺度、教師効力感の下位尺度、進路選択に対する自己効力尺度の信頼性係数を算出した (Table 1)。曖昧さの受容と子ども理解・関係形成効力感の α 係数がやや低かったが、その他の下位尺度については概ね十分な内的整合性が得られた。

Table 1 教育相談における曖昧さへの態度、教師効力感、進路選択に対する自己効力の α 係数

	教育相談における曖昧さへの態度					教師効力感			
	不安	統制	排除	享受	受容	学級管理	教授・指導	子ども理解	進路選択
α 係数	.87	.81	.76	.78	.67	.86	.82	.62	.89

教師志望（志望している群・迷っている群）を独立変数、教育相談における曖昧さへの態度の下位尺度、教師効力感の下位尺度、進路選択に対する自己効力尺度の平均値を従属変数とする t 検定を行った。その結果、進路選択に対する自己効力においてのみ有意差がみられ ($t(118) = 3.51$, $p = .001$, $d = .66$)、教師を志望している群の方が、教師になるかを迷っている群よりも、進路選択に対する自己効力が高かった。教師志望の各群における各下位尺度の平均値、標準偏差および t 検定の結果 (t 値、Cohen's d) を Table 2 に示す。

Table 2 教師志望の各群における各下位尺度の平均値（標準偏差）および t 検定の結果

	教育相談における曖昧さへの態度					教師効力感			
	不安	統制	排除	享受	受容	学級管理	教授・指導	子ども理解	進路選択
教師志望	4.27 (0.89)	4.23 (0.67)	3.48 (0.85)	4.81 (0.58)	3.59 (0.76)	2.91 (0.65)	3.08 (0.61)	3.35 (0.58)	2.75 (0.51)
迷っている	4.25 (0.93)	4.22 (0.68)	3.47 (0.74)	4.91 (0.59)	3.64 (0.82)	2.83 (0.48)	3.09 (0.53)	3.22 (0.54)	2.41 (0.51)
t 値	0.12	0.05	0.08	0.90	0.35	0.74	0.07	1.23	3.51**
d	.02	.01	.02	.17	.07	.14	.01	.23	.66

** $p < .01$

(2) 教育相談における曖昧さへの態度と教師効力感の相関分析

教育相談における曖昧さへの態度の下位尺度と教師効力感の下位尺度の相関係数を求めた (Table 3)。その結果、曖昧さへの不安はすべての教師効力感の下位尺度と有意な負の相関がみられた。また、曖昧さの統制は教授・指導効力感と有意な正の相関が、曖昧さの享受は子ども理解・関係形成効力感と有意な正の相関がみられた。曖昧さの排除と曖昧さの受容はいずれの教師効力感とも有意な相関はみられなかった。

Table 3 教育相談における曖昧さへの態度と教師効力感の相関係数

	学級管理・運営	教授・指導	子ども理解・関係形成
曖昧さへの不安	-.39 ***	-.24 **	-.31 **
曖昧さの統制	.14	.20 *	-.09
曖昧さの排除	.01	.10	.08
曖昧さの享受	.15	.11	.28 **
曖昧さの受容	.03	-.00	-.07

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

(3) 進路選択に対する自己効力の高低を独立変数とする t 検定

進路選択に対する自己効力の平均値を基準に高群 ($n=62$) と低群 ($n=58$) に調査対象者を分類した。進路選択に対する自己効力 (高群・低群) を独立変数、教育相談における曖昧さへの態度および教師効力感の各下位尺度の平均値を従属変数とする t 検定を行った。その結果、曖昧さへの態度については、曖昧さの統制において有意差がみられ ($t(118) = 2.30, p = .023, d = .42$)、高群の方が低群よりも曖昧さの統制が高かった。教師効力感については、すべての下位尺度に有意差がみられ (学級管理・運営: $t(118) = 3.84, p < .001, d = .70$; 教授・指導: $t(118) = 2.68, p = .008, d = .49$; 子ども理解・関係形成: $t(118) = 2.27, p = .025, d = .42$)、高群の方が低群よりも教師効力感が高かった。進路選択に対する自己効力高低群における各下位尺度の平均値、標準偏差および t 検定の結果 (t 値、Cohen's d) を Table 4 に示す。

Table 4 進路選択に対する自己効力高低群における各下位尺度の平均値 (標準偏差) および t 検定の結果

	教育相談における曖昧さへの態度					教師効力感		
	不安	統制	排除	享受	受容	学級管理	教授・指導	子ども理解
進路高群	4.13	4.36	3.47	4.93	3.66	3.07	3.22	3.41
	(1.01)	(0.65)	(0.82)	(0.63)	(0.88)	(0.62)	(0.56)	(0.58)
進路低群	4.40	4.08	3.49	4.75	3.56	2.68	2.94	3.18
	(0.75)	(0.67)	(0.81)	(0.50)	(0.66)	(0.49)	(0.57)	(0.53)
t 値	1.68	2.30*	0.16	1.72	0.73	3.84***	2.68**	2.27*
d	.31	.42	.03	.31	.13	.70	.49	.42

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

(4) 進路選択に対する自己効力の高群・低群における、曖昧さへの態度と教師効力感の相関分析

進路選択に対する自己効力高群について、教育相談における曖昧さへの態度の下位尺度と教師効力感の下位尺度の相関係数を求めた (Table 5)。その結果、曖昧さへの不安はすべての教師効力感の下位尺度と有意な負の相関がみられた。また、曖昧さの享受は学級管理・運営効力感、子ども理解・関係形成効力感と有意な正の相関がみられた。曖昧さの統制、曖昧さの排除、曖昧さの受容はいずれの教師効力感とも有意な相関はみられなかった。

進路選択に対する自己効力低群について、教育相談における曖昧さへの態度の下位尺度と教師効力感の下位尺度の相関係数を求めた (Table 6)。その結果、曖昧さの統制と子ども理解・関係形成効力感においてのみ有意な負の相関がみられた。

Table 5 進路選択に対する自己効力高群における曖昧さへの態度と教師効力感の相関係数

	学級管理・運営	教授・指導	子ども理解・関係形成
曖昧さへの不安	-.44 ***	-.26 *	-.38 **
曖昧さの統制	.08	.17	.05
曖昧さの排除	-.05	.19	.10
曖昧さの享受	.27 *	.15	.32 *
曖昧さの受容	-.03	-.10	-.02

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 6 進路選択に対する自己効力低群における曖昧さへの態度と教師効力感の相関係数

	学級管理・運営	教授・指導	子ども理解・関係形成
曖昧さへの不安	-.22	-.15	-.14
曖昧さの統制	.07	.14	-.34 **
曖昧さの排除	.10	.01	.07
曖昧さの享受	-.16	-.01	.16
曖昧さの受容	.07	.10	-.19

** $p < .01$

4. 考察

(1) 教育相談における曖昧さへの態度と教師効力感の関連

教育相談における曖昧さへの不安は、教師効力感のすべての下位尺度と負の関連を示した。曖昧さへの否定的態度のなかでも曖昧さへの不安が、特定の領域に限らず教師効力感の低さと関連すると考えられる。心理臨床家においても、心理面接における曖昧さへの不安とカウンセリング自己効力感の低さの関連が示されており (西村, 2012b)、本研究においても同様の結果となった。教育相談において遭遇する割り切れない答えのない事態に対して不安が喚起される

のは当然のことであろうが、その曖昧さへの不安が教師効力感の低さと関わることについても留意しておく必要があるだろう。

教育相談における曖昧さの統制は、教授・指導効力感と正の関連を示した。教授・指導効力感とは、授業に必要な指導技術や子どもの学習状態の把握（春原，2007）といった、教師のティーチングスキルに関わる効力感であるといえる。多様化・複雑化し、明確な答えの出ないことも多い教育相談において、曖昧さを明確にして対処していこうとする態度を持つ学生は、教職全般においても統制的な態度を志向しやすい可能性が考えられる。曖昧さを統制しようとする態度を持つことは、より明確な対応や指導を求められるティーチングスキルの側面に関する効力感につながる事が考えられる。

教育相談における曖昧さの享受は、子ども理解・関係形成効力感と正の関連を示した。曖昧さへの肯定的態度のなかでも曖昧さの享受が教師効力感と関連するといえる。心理面接における曖昧さへの享受がカウンセリング自己効力感の高さと関連するという心理臨床家の傾向（西村，2012b）とも一致している。子ども理解・関係形成効力感とは、子ども理解や子どもとの人間関係に関わる効力感であり（春原，2007）、教育相談やカウンセリングマインドと関連する効力感であるといえる。曖昧さに対して関心を向けて開かれた態度を持つことが、子どもを理解することや子どもと関係をつくっていく際に有用であると考えられる。

以上より、曖昧さへの否定的態度のなかでも、情緒的な否定的態度である曖昧さへの不安は教師効力感の低さと関連する一方で、認知的な否定的態度である曖昧さの統制は教師効力感の教授・指導面の高さと関連することが示された。曖昧さへの否定的態度にはその側面によって異なる働きがあると考えられる。また、曖昧さの統制と曖昧さの享受は教師効力感の高さと関連したが、どのような教育相談における曖昧さへの態度を持つことが効果的なのかについては、教職の領域により異なることが示唆された。

（2）進路選択に対する自己効力の高低における、曖昧さへの態度および教師効力感の比較

進路選択に対する自己効力が高い学生は、低い学生と比べて、教育相談における曖昧さの統制が高かった。進路選択に対する自己効力は、「自分が従事したい職業（職種）の仕事内容を知ること」「自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと」といった項目からなり、進路の計画力および進路の選択力と関わる自己効力感である（浦上，1995）。本研究の調査対象者は教員養成大学生でかつ教師を志望しているあるいは教師になるかを迷っている学生であったことから、進路の計画や選択は主に教職に就くことに関するものであると推察できる。そのため、進路選択に対する自己効力の高い学生は、教職に関して考えたり検討したりする機会が多いと考えられる。高嶋他（2007）は、教師は客観的に問題の状況を把握し、それを指導し、収束・解決していこうとする視点を持つことを示している。これは曖昧さの統制に通じる態度であるといえるだろう。進路選択に対する自己効力が高い学生は、曖昧さの統制を教師の専門的態度としてとらえやすいかもしれない。それゆえ、教育相談においても、曖昧さを明確にして対処していこうとする傾向が高くなるのではないかと考えられる。

また、進路選択に対する自己効力が高い学生は、低い学生と比べて、教師効力感のすべての領域の効力感が高かった。一方、教師志望の学生と教師になるかを迷っている学生の間には教師効力感の有意な差はみられなかったことから、単に教職への志望の強さではなく、教職とい

う進路に対して学生自らが主体的・計画的に選択できるという自信が、教職への自信を持つためには重要であると考えられる。

(3) 進路選択に対する自己効力の高低における、曖昧さへの態度と教師効力感の関連

進路選択に対する自己効力が高い学生においては、教育相談における曖昧さへの不安はすべての教師効力感の下位尺度と負の関連を、曖昧さの享受は学級管理・運営効力感および子ども理解・関係形成効力感と正の関連を示した。進路選択に対する自己効力の高い学生は、主体的に教職に関する学びについて考えたり振り返ったりすることが多くなるため、教育相談における曖昧さへの態度と教師効力感の関連は、進路選択に対する自己効力の高い学生に顕著に生じるのではないかと考えられる。

さらに、進路選択に対する自己効力の高い学生に焦点を当てた場合、教育相談における曖昧さの享受と学級管理・運営効力感の間にも正の関連がみられた。学級管理・運営効力感とは、子どもたちを管理・指導し、まとまりのある学級をつくることに関わる効力感（春原，2007）である。児童生徒という個との関わりだけでなく、学級という集団もさまざまな曖昧さをはらんでいる。教職への意識が高まることで、曖昧さに関心を持ちながら関与しようとする態度は、子ども理解や子どもとの関係形成にとどまらず、学級運営の際にも生かされる可能性が考えられる。

一方、進路選択に対する自己効力が低い学生においては、教育相談における曖昧さへの態度と教師効力感との間にはほぼ関連がみられず、曖昧さの統制と子ども理解・関係形成効力感にのみ負の関連が示された。進路指導に対する自己効力の低い学生は、教育相談における曖昧さの統制の態度を持ちにくい傾向がみられている。子ども理解・関係形成効力感とは、教師効力感の領域のなかでも大学生が一番効力感を抱きやすい領域であり（春原，2007）、教育実習以前の学習の影響の大きさが指摘されているが（増田・田爪，2015）、教職という進路選択に自信がない場合、教育相談上の課題に明確に対処したり解決しようとするのと、児童生徒と肯定的な関係を築くことの両立が難しく、統制的な態度はカウンセリングマインドに関わる効力感の低下につながる可能性が考えられる。生徒指導提要では、「学級・ホームルーム担任として、集団に重点を置く規範的・指導的態度と個に重点を置く受容的・相談的態度のバランスを取るのが難しいという声が聞かれる（文部科学省，2022，pp.88）」ことをふまえながら、生徒指導と教育相談が一体となったチーム支援の重要性が指摘されている。教職に就くかの探索の途上にある教員養成大学生においても、規範的・指導的態度と受容的・相談的態度のバランスの育成が課題となるだろう。

(4) まとめと今後の課題

本研究では、教員養成大学生を対象に、教育相談における曖昧さへの態度と教師効力感の関連について検討を行った。その結果、教員養成大学生が教育相談において曖昧さへの不安を感じることが教師効力感の低さと関連することが示された。また、曖昧さの統制と曖昧さの享受は、教師効力感の異なる側面とそれぞれ関連を持つことが示された。さらに、教育相談における曖昧さへの態度と教師効力感の関連は、進路選択に対する自己効力の高い学生に顕著にみられた。

本研究の課題として、対象者の特性があげられる。対象となった教員養成大学生の志望校種は、

小学校と幼稚園の人数が多く偏りがあった。本研究では校種を問わず分析を行ったが、校種の特徴や幼児・児童・生徒の発達段階などにより、求められる曖昧さへの態度や教師効力感の持ちやすさは異なると考えられる。また、今回の調査対象者は教育相談の授業は受講していたが、本科目は教育実習以前に開講されているため、教育実習をまだ経験していない学生がほとんどであった。増田・田爪（2015）は、実習経験のない学生の学級管理・運営効力感および教授・指導効力感は特性的自己効力感と関連がみられなかったことから、実習経験のない学生の持つこの2つの効力感は仮想的な教師効力感ではないかと推察している。調査対象者を増やして、志望する校種や教育実習経験による違いについても検討する必要があると考えられる。

本研究の展開としては、教員養成大学生のみならず、現職教員を対象に調査を行い、教育相談における曖昧さへの態度について再検討を行うことが考えられる。そして、現職教員と教員養成大学生の教育相談における曖昧さへの態度の特徴や教師効力感との関連について比較検討をしていくことで、教員養成における学びと現場での実践を通しての学びの両者の間を橋渡しする知見を得ることができるだろう。

付記

本研究は、日本パーソナリティ心理学会第30回大会、日本教師教育学会第32回大会にて発表された研究にデータを追加して再分析を行ったものである。本研究は、JSPS 科研費20K03365の助成を受けた。

引用文献

- Ashton, P. T. (1985). Motivation and the teacher sense of efficacy. In C. Arnes & R. Ames, (Eds.), *Research on Motivation in Education, Vol 2* (pp141-174). Academic Press.
- Budner, S. (1962). Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality*, 30, 29-50. <https://doi.org/10.1111/j.1467-6494.1962.tb02303.x>
- 中央教育審議会（2021）。「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申） Retrieved April 29, 2024, from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm
- Enoki, H., Koda, M., Nishimura, S., Kondo, T. (2019). Effects of attitudes towards ambiguity on subclinical depression and anxiety in healthy individuals. *Health Psychology Open*, 6 (1) <https://doi.org/10.1177/205510291984061>
- Frenkel-Brunswik, E. (1949). Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable. *Journal of personality*, 18, 108-143.
- 春原 淑雄（2007）. 教育学部生の教師効力感に関する研究－尺度の作成と教育実習に伴う効果－日本教師教育学会年報, 16, 98-108. https://doi.org/10.32292/jsste.16.0_98

- 春原 淑雄・坂西 友秀 (2010). 「教職入門」における模擬授業が教師効力感に及ぼす効果 埼玉大学紀要 (教育学部), 59, 55-65. <https://doi.org/10.24561/00017486>
- 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会 (2017). 教職課程コアカリキュラム Retrieved April 29, 2024, from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/houkoku/1398442.htm
- 増田 真也 (1998). 曖昧さに対する耐性が心理的ストレスの評価過程に及ぼす影響 茨城大学教育学部紀要 (人文・社会科学・芸術), 47, 151-163.
- 増田 優子・田爪 宏二 (2015). 教師志望学生における教師効力感と特性自己効力感との関係ー実習経験者と実習未経験者との比較ー 京都教育大学教育実践研究紀要, 15, 211-218.
- 文部科学省 (2022). 生徒指導提要 Retrieved April 29, 2024, from https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1404008_00001.htm
- 文部科学省 (2023). 誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策 (COCOLO プラン) Retrieved April 29, 2024, from https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1397802_00005.htm
- 長岡 大・松井 賢二・山田 亮 (2001). 大学生の進路選択に対する自己効力と進路 (キャリア) 成熟ー教育実習前後の比較を通してー 進路指導研究, 20 (2), 11-20. https://doi.org/10.20757/career.20.2_11
- 西村 佐彩子 (2007). 曖昧さへの態度の多次元構造の検討ー曖昧性耐性との比較を通してーパーソナリティ研究, 15, 183-194. <https://doi.org/10.2132/personality.15.183>
- 西村 佐彩子 (2012a). 心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度尺度の作成 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 338. https://doi.org/10.4992/pacjpa.76.0_1PMC20
- 西村 佐彩子 (2012b). セラピストの曖昧さへの態度とカウンセリング自己効力感の関連 日本パーソナリティ心理学会第 21 回大会発表論文集, 83.
- 西村 佐彩子 (2021). 教員養成大学生の教育相談における曖昧さへの態度尺度 日本心理学会第 85 回大会発表論文集, 203. https://doi.org/10.4992/pacjpa.85.0_PP-052
- 西村 佐彩子 (2022). 心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度が持つ意味ー臨床心理士への面接調査を通してー 総合教育臨床センター研究紀要, 1, 31-39.
- 白尾 秀隆・今林 俊一・川畑 秀明 (2005). 教員養成学部生の進路選択に対する自己効力 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 15, 157-164.
- 高嶋 雄介・須藤 春佳・高木 綾・村林 真夢・久保 明子・畑中 千紘・山口 智・田中 史子・西嶋 雅樹・桑原 和子 (2007). 学校現場における教師と心理臨床家の「視点」に関する研究 心理臨床学研究, 25, 419-430.
- Taylor, K. M., & Betz, N. E. (1983). Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 22, 63-81. [https://doi.org/10.1016/0001-8791\(83\)90006-4](https://doi.org/10.1016/0001-8791(83)90006-4)
- 友野 隆成・橋本 宰 (2005). 改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み パーソナリティ研究, 13, 220-230. <https://doi.org/10.2132/personality.13.220>
- 浦上 昌則 (1995). 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 42, 115-126. <https://doi.org/10.18999/bulfep.42.115>

- 浦上 昌則・脇田 貴文 (2016). 項目反応理論を用いた進路選択に対する自己効力尺度短縮化の試み
南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編, 12, 67-76. <https://doi.org/10.15119/00000846>
- 宇津木 誠 (2000). 「曖昧状況と教師のメンタルヘルス」に関する一研究—曖昧耐性・強迫的メンタリティ・自己効力感の3つの観点から—つくば国際短期大学紀要, 28, 61-78.
- Youell, B. (2006). *The Learning Relationship: Psychoanalytic Thinking in Education*.
(平井正三 (監訳)・鈴木誠 (訳) (2009). 学校現場に生かす精神分析【実践編】—学ぶことの関係性— 岩崎学術出版社)

